

「海道東征」はモーセ 新保氏

敗戦後、連合国軍総司令部（GHQ）に与えられた枠の中で思考していた日本人。世界の秩序が溶解しつつあるいま、新たな思考の「足場」を求め始めたようだ。それは自らの歴史の中にある。それも遠い昔ではなく、明治という時代に。第33回正論大賞の受賞が決まった文芸批評家の新保祐司氏と東アジア開発経済学の泰斗で拓殖大学学事顧問の第27回同賞受賞者、渡辺利夫氏に語ってもらった。（司会・構成 産経新聞文化部 桑原聡）



桑原 おげましておめでとうございます。新保先生、正論大賞受賞、誠にありがとうございます。本日は渡辺先生をお迎えして、日本人が自身の歴史を取り戻すには何をすべきか、存分に語りあっていたらいいと考えています。まず、新保先生の発言と言論によって実現した「海道東征」（注①）の復活演奏会からお話を始めていた方がいいと思います。この出来事は戦後の日本文化史において真にエポックメイキング的なものでした。

新保 ずっと感じていたことなんです。日本人は自分の歴史をきちんと回想する力を失ってしまったのではないかと。渡辺 確かに。敗戦後、戦前を悪くたたき込まれてから、日本人はその力を喪失してしまっただけですね。新保 私は思うんです、回想というのは一種の創造でしょう。渡辺 実にいいご表現です。新保 大伴家持は中年になっ

て、朝廷の親衛隊である大伴氏の「言立」を回想することで、自分のなすべきことを自覚しました。個人も民族も回想する力がなければ、ただ流される浮草のような存在になってしまう。結局、民族の力とは歴史を回想する力に戻ります。強い民族は、自分たちの歴史をしっかりと覚えていく。戦後の日本人は歴史を忘れ過ぎています。だから浮草になってしまわう。弱い。神武天皇も知らなければ、神武東征も知らない。ほかの民族ではありえないことではないでしょうか。アブラハムを知らないユダヤ人を想像できませんか。渡辺 その意味で「海道東征」の復活演奏会が日本各地で何度も開かれたのは本当に慶賀すべきことでした。桑原 新保先生が言論で「海道

東征」の復活演奏会をアピールし始めたころ、正直に告白すれば、今の日本では困難だろうと思っただけです。この10年で日本人の心は大きく変わっています。渡辺 時代の潮流は、あつて振り返らないと分からないことが多いですからね。新保さんは、復活演奏会の決断は手は何だったかと考えますか。新保 おそらく「戦後封印された」ということが響いたように思います。日本人のアイデンティティを求めようとする人々には、封印されたものの中に、そのヒントがあると感じ取ったように思います。

渡辺 同感です。これまで封印が解かれなかったのは、封印されたままのほうで安逸に生きられたからです。自分の頭で考えなくてはならないですから。冷戦終結までは、今振り返ると懐かしいほどに安定的な時代でした。平和の配当をいいたきながら安逸に暮らせた。だから封印されたままでもかまわなかった。ところが冷戦終結後、徐々に「このままではまずいのでは」という覚醒が始まった。それでもそれは国民的覚醒にまではいたらない。たとえば北朝鮮の核開発は随分前から分かっているにもかかわらず、見ぬ振り。拉致問題も産経新聞がスクープしたにもかかわらず、そのほうが楽だったからです。別の言い方をすれば、日本人は自分の顔を鏡に映してみようとはしなかった。ところがこの数年、このままでは昔のように安逸に暮らせないことがさすがにはつきり分かってきた。昨年の総選挙で自民党が大勝したのもその流れだと思えます。

明治150年 覚醒始まる 渡辺氏

第33回正論大賞 新保祐司氏



しんぼ ゆうじ 昭和28年5月、仙台市生まれ。都留文科大学教授。東京大学文学部仏文科卒業後、出光興産に入社。平成2年に、近代日本の矛盾と葛藤を体現した内村鑑三を批評した「内村鑑三」を上梓（じょうし）。8年に退職後、本格的な執筆活動に入り、同年に都留文科大学助教授に就任、10年から教授。音楽という導入部から思想や歴史への考察を織り交ぜる独特な手法を確立し、第8回正論新風賞を受賞、北原白秋作詩・信時潔作曲の交声曲「海道東征」の復活公演にも尽力する。著作に「島木健作 義に飢え渴く者」「正統の垂直線 透谷・鑑三・近代」「信時潔」「明治頌歌（しょうか） 言葉による交響曲」「『海道東征』への道」など。

強い民族に歴史回想の力

です。信時は深く宿命を引き受け、信時版があり、日本人が心から愛したのが信時版だった、ということもつながりますね。私はスコットランド民謡のメロディーに乗せて歌われる「蛍の光」に日本人であることを意識させられます。というのは、純日本的なものに拘泥する必要はないというのです。新保 ええ、ですから日本的なもの、閉じた形で提供するのではなく、世界に開かれた形を模索する必要があります。私には「海道東征」や「海ゆかば」は大きなヒントを与えてくれてます。渡辺 それはいい考えですね。ジャーナリズムには大いに協力してほしいところです。それにして

注① 海道東征 昭和15年、「皇紀2600年」奉祝曲として北原白秋の詩に信時潔が曲をつけて完成させた。日本建国神話を格調高く8つの場面で描いた交声曲（カンタータ）。オーケストラに5人のソリスト、大人数の混声合唱団、児童合唱団が加わった壮麗な作品。
注② 出エジプト 旧約聖書の「出エジプト記」で、モーセに率いられたイスラエルの民が圧政のエジプトから逃れてシナイ山に到着するまで、民族の苦難と神の救済、「十戒」の授与による倫理的規範の成立などが描かれる。



平成27年11月、大阪市北区のザ・シンフォニーホールで開催された「海道東征」の復活公演（恵守乾撮影）

正論 新春対談



対談に臨む新保祐司氏(左)と渡辺利夫氏(右) 大手町の産経新聞社 (いずれも飯田英明撮影)

「非凡なる凡人」躍動 新保氏

渡辺 もちろんそうですね。新保 彼らも日本人として西郷の考えが正しいとは思っていませんが、西郷の考えが日本を担う中で、西郷の考える方向では危ないと感じていて、そのときに西南戦争が起きました。新政府は西郷を殺してしまいましたが、私には西郷を殺したのが道徳的墮落が始まるのは、西郷を殺したという記憶がなくなってしまうのではないのでしょうか。新保 今年、NHKが大河ドラマで西郷隆盛を取り上げますが、

凜とした気概と秩序 渡辺氏

新保 福澤の「本物さ」というのは、西郷に対する評価に極まるんじゃないですか。新保 その通りです。それに加えて「瘡我儘の説」における勝海舟、榎本武揚の処進退に対する憤怒です。新保 勝海舟が江戸城無血開城を実現したから江戸が焼けなくてすんだ、なんて評価する人がいるが、「一時の兵禍を免かれしめたる、万世の士氣を傷つけたる」と、その功罪相償うべきや」と批判していますね。「万世の士氣、いい言葉ですね。この「万世」という歴史感覚、これを取り戻さなくてはならないと思います。渡辺 そうです。士風士魂、それは福澤思想のエッセンスだと思います。文明化・近代化を求め、強く求めた人間でありながら、リーダーは士風士魂を持った人間でなければならぬという口

めっちゃくちゃな時代でもありますが。ある意味では非常に残酷な時代でもあり、光と影がはっきりしています。そういう時代であるがゆえに、逆説的に明治人は生きるのが面白かったんじゃないでしょうか。今の日本人よりもはるかに。私が明治の精神を最も感じる作家のひとり、国木田独步で、彼には「非凡なる凡人」という短編小説があります。貧しく特別な才能や環境に恵まれなくても、一步一步実直に努力することで自分の人生を切り開いた友人を描いた作品です。私はこの主人公こそ明治人の典型だと考えています。こんな「非凡なる凡人」が多かったら、明治という時代は躍動していたのだと思います。渡辺 「非凡なる凡人」とは言い得て妙ですね。確かに明治はいろいろな人々に支えられていたと思います。いや、今日の対談で明治への愛慕の気持ちがさらに強くなりました。私もありがとうございます。新保 はい、ありがとうございます。

桑原 今年は明治150年にあたります。西欧列強に植民地化されまいと奮闘した明治人を回想することは、「自分の歴史を取り戻す」という本日のテーマに合致すると思います。新保 先生は内村鑑三、渡辺先生は福澤諭吉の画期的な評伝をお書きになっています。まず新保先生、内村鑑三との出会いからお話を始めていただけますか。新保 はい。三島由紀夫が自決したのが昭和45年でした。三島はその年の7月、サンケイ新聞に「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであらう」と書きました。そのとき私は高校生でした。三島の言うからっぽな日本の中でその後ずっと生きてきて、きつと何かを求めていたのだでしょう。神田の古本屋で偶然に内村鑑三の「ロマ書の研究」(注①)に出会った。それを読み、アメリカ文明に浸潤された日本の中で、日本人として生きていく精神的パネを手に入れた気がしたのです。それまで私は小林秀雄の影響を受けて、小林的文芸批評を試みていましたが、小林だけではパネにならなかった。小林は三島と同じ「美」の人なんです。でも「美」だけではパネにならない。何が必要か。それは「義」だった。内村が私に与えてくれたのは、「義」を求めなければならぬということでした。こうして私は「美」と「義」を2定点とする構図としての批評を試みるようになったので

す。桑原 よく分かりました。渡辺 先生は「土魂—福澤諭吉の真実」を刊行されました。諭吉の出会いからお聞かせください。渡辺 私は昭和14年の生まれです。戦後教育、つまり日教組教育の申し子です。GHQ史観をそのまま受け入れて大学に進みまして。大学3年生のときに安保闘争があつて、訳も分からず左翼的な風潮の中に身を委ねた。それから全共闘運動が始まりますが、

きそれを支えている思想や論理がどうしてこうもいいかげんなのか、ということに肌身に強く感じられるようになりました。時代の支配の空気に違和感を覚えた私は、日本の近代を学び直そうと、諭吉の著作を中心に明治期の文献を読み漁るようになりました。そこで私は、凜とした気概と秩序のあつた明治という時代を発見しました。新保さんは明治を愛慕しています。私は明治を愛慕しています。桑原 渡辺先生のご専門は東

シアの開発経済ですが？ 渡辺 私は開発経済学の素材を求めてアジアを這うように歩いてきた人間です。ですから中国や朝鮮にも強い関心があり、日本と中国、朝鮮を比較考察する癖があります。それが考えを深めるのに役立ったと思っています。近代化について考えると、日本は明らかに成功した。しかし朝鮮と清国は明らかに失敗した。その差はどこにあったのか。日本では旧体制が新しい体制の人材を育てていた

ということ。江戸時代、つまり封建主義の時代は、各藩が独自の法律を持ち、それぞれに人材を育てていた。特に西南雄藩には有力な人材が育っていた。それが一旦緩急あらばという事態になって中央に結果、旧体制をひっくり返し、猛烈なエネルギーをもって新体制を運営したのです。中央集権的王朝国家はパワフルに見えますが、これは外装だけ。中央が腐ってもこれをひっくり返す力が国内に育っていない。清の末期には

洋務運動が起こりました。西洋の技術を導入するだけで近代化できると思ひ込んでいたんですね。そこには衰退した王朝国家をひっくり返して新しい体制をつくらうという発想はなかった。こんなふうに比較考察すればするほど、明治人への思いが強く深くなっているのだ。新保 なるほど。私が明治を愛するのには、ハ短調の音楽が聞こえてくるからです。具体例を挙げればベートーベンの交響曲第5番やブラームスの交響曲第1番、苦難を経て勝利するという展開が聞こえてくるんです。平成の時代からは調性の崩壊した音楽しか聞かえてきません。三島が自決した昭和45年当時は、のっぴり明るい長調の音楽が鳴っていました。いま思い返せば、それに似て立っていた私は内村に出会うことになった。明治人である内村、北村透谷、石川啄木、国木田独步を眺むと、そこにはまさに短調が鳴っている。精神の悲切な持情があります。もちろん明治にも与謝野晶子や鉄幹のような一明星一派の長調的な精神も存在しましたが、明治150年の今日、回想すべきは、短調としての明治だと私は思います。桑原 明治が短調の音楽を生み出す理由をどう考えますか。新保 植民地化の危機という受難もありますが、西郷隆盛の死の影響も大きいと思います。日本は明治10年に西郷を殺して近代をつくっていった。そのことを大久保利通も伊藤博文も意識していた。



第27回正論大賞 渡辺利夫氏

わたなべ・としお 昭和14年6月、甲府市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒、同大学院経済学研究科修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授から拓殖大学教授に。同大学学長、総長を歴任し、平成27年から同大学顧問。28年から日本李登輝友の会会長。著書に「成長のアジア 停滞のアジア」(吉野作造賞)、「開発経済学」(大平正芳記念賞)、「西太平洋の時代」(アジア太平洋賞大賞)、「神経症の時代」(開高健賞)、「新脱亜論」「放哉と山頭火一死を生きる」「土魂—福澤諭吉の真実」「国家覚醒—身捨つるほどの祖国はありや」「アジアを救った近代日本史講義—戦前のグローバリズムと拓殖大学」など。